

甲陽だより

発行所
西宮市甲子園高塚町3番7号
甲陽学院同窓会
電話西宮(0758)41-0222 番623番
郵便番号 663
編集人 原 清
印刷所
特 石川印刷出版社
神戸市兵庫区中道通3丁目3-6
電話番号 (078) 573-3761 (代)

光栄ある現代へ

同窓会会長 原 清

六十年の歴史と想い出の数々が込みこんだ甲子園の土、などと言うと、夏の高校野球と間違えられそうだが、真実、われわれの母校が今やその隆祥の地と訣別することになったのです。

一万人を超える同窓生たちは、その卒業年度によって、それぞれ想い出の内容が異なるでしょう。ベンキ塗りの校舎や枝川の清流を懐しむ人もあれば、校舎周辺の毒畑や甲子園浜の水練学級の想い出にふける人もあります。

しかし、すべては大きな時代の歯車とともに去ってゆきました。新しい時代が来たのです。由緒の甲子園から緑の処女地、甲山々麓へ——それは感傷を超えた新世紀への逞しい進発です。

敷地面積九万八千四百平方メートル、建築面積四千七百平方メートルという雄大な甲陽学院高校の偉容は、既に甲山々系の一角に姿を現わしています。来春からの高校生たちは、いっせいにこの新校舎へ通学することになるはずで

私は在学時代から、時の校長伊賀駒吉郎先

生が示された「甲陽十二訓」のうち、第三訓「一ばん好きでした。いわく「過去を払拭せよ、未来は信頼せよ。而して光栄ある現在に生活せよ。」

私は中学以来、常にこの言葉を座右の銘として信奉し、実行して来ました。過ぎ去った想い出に固執しては進歩がない。常に眼をあげて未来を見つめつつ、しかも光り輝やく現代に生きよ、という訓です。いつの時代にも通用する哲理です。人生訓です。

今年限りの母校の同窓会を惜しむ前に、来年以降の同窓会総会を、いかに画期的なもの、いかに躍進的なものにするか、を考えねばならぬと思っています。

幸い今年も、若き卒業生諸君を中心に総会準備が猛烈に進められているとき、嬉しく頼もしく感じています。

五年ぶりに改題される名簿の刊行、同窓会実務機構の整備、会費納入の確保など同窓会事業の諸懸案も、やがてはじまる甲陽学院の新生活の中で、着実に咲き、実ってゆくことを信じて疑いません。

甲陽学院同窓会

夏季大会御案内

第五十八回甲陽学院同窓会を左記要領で開催致します。甲子園の母校で行われるのも今回が最後というところで、企画・運営に当たっている新卒業生諸君も大いに張り切って

おります。(第二面参照)又、恒例のようにになりましたゲスト講演には、今回、藤本義一氏に来て頂くことになっております。更に、運動場で会員諸氏にゴルフの腕前を競って頂くような趣向も企画されておりますので、暑い盛りではありますが、どうか多数参加頂きますようお願い致します。

記

日時 八月二十七日(土) 午後二時より

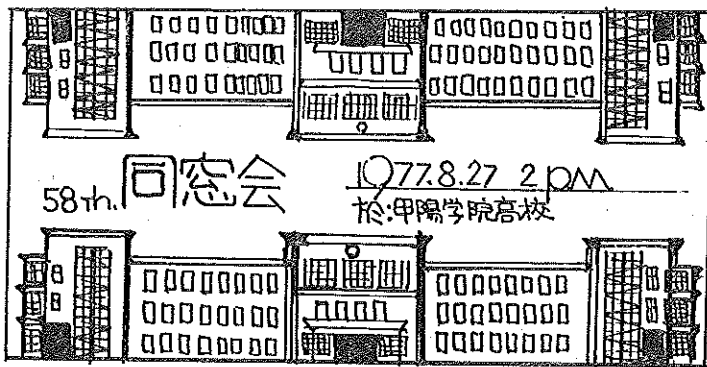
場所 甲陽学院高等学校 講堂及び運動場

会費 一般会員 二、〇〇〇円
学生会員 一、〇〇〇円

特別会員及び今春卒新人会員は無料招待

申込み 準備の都合上、なるべく早

目に同封の振替用紙で、年会費共々御申込み御送金下さい。



(イラスト・在校生 乾 純)

新しい高校の窓を通して

学校長 小河清麿

梅雨入りを目前にした六月上旬の晴れた日の午後、多くの先生方と一緒に高校新校舎の工事の状況などを見学する機会をもったのですが、予定されている各建物のすべてのコンクリート打ちも殆んど終り、各棟共に規模の概算がほぼ把握できるまでに、内装も一部で着手され、工事も初めの予定通りに捗っているようでした。

それらの建物のうち、一番南側にある普通教室棟内を見学しておりましたとき、その日は特によく晴れていて、大阪湾も一望に眺められた窓辺からは、はるか東の方の大阪の空が大きく拡がり、眼下には夙川の堤の緑の帯が続き、そのむこうには西宮の市街地。頭をめぐらせば北山公園、甲山に続く六甲の木々の緑と。

このときふと、甲陽にゆかりの歌のなかに、このような光景がよまれていたように思ったのでした。「甲陽学院のうた」にもあります。

大地のほてり われらをつつむ
大地のいぶき われらにひびく
愛なり 智恵なり 光なり
山に問えば 山は答う
海に問えば 海は答う

しかし、もっと古くから甲陽で歌われている歌の中には、もっと鮮烈に画かれているのでした。

「甲陽行進曲」です。

一、海に連なる六甲の 山の緑を窓にして
松の葉越に行き通う

帆影も近き茅渚の海
我が甲陽の健男子

二、清き園生にあこがれて
遠く来たりし君なれば

夕べの星のささやきも
若き希望を語るらん

我が甲陽の健男子

三、自然の恵み人の愛 清き光の中にこそ
心も身をもすこやかに
自由の子等は育つなれ

我が甲陽の健男子

今にして思えば、実に大らかな光景ではありませんか。「山の緑を窓にして、松の葉越に行き通う、帆影も近き茅渚の海。」

創立当初は、教室の窓から六甲の山々の緑と、光にかがやく大阪湾が近く望まれたに違いないありません。六甲山の寒風を、まともに受けたかも知れませんが、夏には甲子園の浜の磯の音をふくんだ風が、教室を吹き抜けたと思われま。

また甲陽高校校歌にもやはり、松の緑と茅渚の浦波、八重の潮路と歌われております。甲陽という学校が誕生し、育ったところには六甲の山々の緑と、光がかがやく大阪湾の潮風があったと思われま。それが今では、いつの頃からか薄らい去られ、忘れ去られてしまっておりま。

それが一転してこの新しい高校の窓には、それらがすべてよみがえったように思えたのです。

甲陽は六十年を経て、再び創立当時の精神、環境にたしかえることができたのではないかと。このことは創立以来常に最善、最良をと心にかけられた法人の尽力に感謝すると同時に、今日までの甲陽の歴史を歩んでこられた諸先輩、同窓の方々の陰の力を思わずにはおれないようす。

はおれないようす。自然の環境と人間とのふれ合いの中から生れるものだろうということが、この新しい校舎の窓から感じられたように思えたのであります。

この新しい校舎の、まばゆいばかりの窓には、次の大きな新しい甲陽の姿が感じられるようでした。

大正九年刊行の校友会誌「甲陽」第三卷

夏 季

今年もまもなく夏期大会がやってまいります。昨年は企画委員が雨神様の祟りを恐れ、長年の夢(?)であるガーデンパーティー形式を放棄してしまいましたが、58回卒はそんなに軟弱ではない、とばかりに講堂での講演の後には野外でやろうと意気込んでおります。毎回好評のゲストは「朝日放送系の人だけでは人材に限られてはいる」(会長サン、失礼)との結論から、藤本義一氏に来ていただく事になりました。藤本氏は作家としてより、む

大 会

に、創立者故辰馬吉左衛門翁の筆になる甲陽中学校設立趣旨にもられた教養ゆたかな有為の人材を育成するという精神を実践する場をとり戻したといえるでしょう。

この秋には、新校舎、校地が完成を見ることとなりますが、この新しく生れかわった甲陽学院高校が、更に良き甲陽の中心になれるよう精進努力をしたいと、この新しい校舎の建設途上の窓から念じたことでした。

しる読売テレビの「11PM」の司会者として有名(?)ですが、本業の方も直木賞受賞にみられるように頑張っておられます。地元・西宮にお住まいで大阪人を愛する氏の独特の語り口は、どうぞ御期待下さい。

さて義一つつあんの話の後はグラウンドで飲み放題、食い放題。ついでにゲームにも御参加下さい。企画の方では只今のところゴルフのニア・ピンゲームを予定しております。豪華賞品(?)も用意されますので、腕に自信のある方、賞品と聞くと目の色が変わる方、長いモノを振り回すのが趣味の方など、

我と思わん方はふるって御参加下さい。ここまですでにいつもならもう何一つ企画など残っていないのが常であります。何となくも今年は甲子園の校舎使納めの年。せいかくそんな年に企画委員になったのだから何かしようということで、甲陽学院の甲子園時代の歴史をまとめた特別企画を練っています。

第一回卒業生の卒業アルバムなどめったにお目にかかれないような品々を集めて展示したいと思っております。これらの展示はグラウンドでのパーティーと並行して教室を使って行ないますので、飲み疲れた方、ゲームに飽きた方はどうぞ御覧になって下さい。とても残念などと言えないような暑い昼さがりですが、お誘い合わせの上多数御参加下さい。

(企画委員・卜田)

甲陽同窓東京懇親会開催案内

日時 昭和五十二年九月十日(土)
午後四時より
会場 交詢社(銀座六丁目) 小松ストア裏
多教同窓の御参加をお待ちしております。特に前回(昭和四十七年十月)御欠席の方々には是非ともお出まし下さい。小河清麿校長も当日参加のため御上京の予定です。会費は四千元程度。会場受付で頂きます。
東京方面の同窓生諸兄は何卒出欠の御都合を左記へ御連絡下さい。
(卒業回数、住所、勤務先、御近況、御友人消息等もぜひ)
三川 川崎市中原区下小田中九三
富士通院社宅二一三四
井上 良彦
(TEL)四一七七一(九空)

総会報告

三月二十五日午後五時より母校の高校において理事会と総会とが開催され、原会長以下約五十名の委員の出席をえて、前年度の事業報告と決算の承認ならびに本年度の事業報告と予算の審議を主要議題として母校同窓会発展のために熱心な討議がおこなわれた。

(一) 昭和五十一年度事業報告
五十一年五月 夏季大会準備委員会が八月に至るまで本年度卒業生を中心に六回にわたり打合せが開催された。

七月 「甲陽だより」二十四号発送、夏季大会案内、年会費納入の依頼をおこなう。
八月 夏季大会、ゲストにキタタロー氏を招き第一会場は講堂、第二会場は体育館で開催。

九月 理事会、次年度大会、卒業生記念品、名簿発行ならびに準備委員、高校移転などにつき審議決定。

十一月 法人、学校、同窓会三者懇談会
十二月 法人、「甲陽だより」二十五号発送
年会費未納者に再度依頼、高校卒業式に原会長の祝辞をいただく。卒業生に記念品贈呈(認印・ケース入り)。「甲陽だより」二十五号配布

三月 理事会、総会
(二) 昭和五十二年度

従来行事を継承し、会員相互の親睦をはかることを目的とし、甲陽だより、夏季大会の充実を企図したい。

(イ) 甲陽だより……印刷費、郵税などの上昇はあるが、年二回の発行は堅持したい。
(ロ) 夏季大会……時期については種々論議もあるが、新卒委員の企画、運営の便と学生会員の多数参加を考慮して従来通りとしたい。
(ハ) 名簿発行……創立六十周年を一年延ば

して来年高校新築移転にともない記念発行を企画しているが、各年次別になるべくなら年内にクラス会か学年会を開催され名簿の充実を期してもらいたい。同窓会本部に住所訂正を申しこまれただけでは到底完全な名簿は出来がたく、各年次の委員の努力をお願いしたい。なお今回の名簿は電通が担当し、広告の面でも積極的なご援助をいただきたいと期待している。

(三) 年会費……会員は毎年二百余名増加しているが納入会員はつねに三分の一に足りない、各期、クラス等の会合の機会に是非とも納入協力の呼びかけをお願いしたい。
三月二十五日の総会では原会長が議長となり五十一年度の決算、五十二年度の予算審議が行なわれたが、出席者全員異議なく可決された。事業報告は合田氏によっておこなわれたが、氏はこの席上とくに同窓会の運営について発言をされ、次の三点に関し委員各位の協力を望まれた。ひとつは同窓会事務をつまでも合田さんにゆだねるということとは不可能で、はやく後任をみつつけ事務の委譲をおこなう必要があるのではないかとということ。ふたつめには従来からいわれつづけていることとであるが、同窓会事務と校内委員の立場との関係のことで、教員の学校内での仕事が繁雑の一途をたどっている現在、校内委員に同窓会関係の仕事をまかすことは大変で、その意味でも改善が強く望まれている。このことは柳原校内委員の持論で総会でもこの問題が大きくとりあげられた。三つめには柳原校内委員の同窓会に対する希望のべられ善処することと約束された。

とところで新校舎は現在着々と進行しておりこの秋には完成予定で、高校生全員が新校舎に移るには来年の四月からであるが、新校舎の正面玄関入口には同窓会室も用意されており、卒業生各位の来校を学校当局は希望していること、この総会席上で披露されたことを最後につけ加えておきたい。

昭和五十二年度予算書

収入之部

科目	予算額	摘要
会費	2,665,000	@500×130人 @1,000×2,000人 新卒会員@3,000×200人
利子収入	150,000	
雑収入	20,000	
繰越金	525,776	
計	3,360,776	

預り金 1,179,500 (52年度分 493,500 53年度以降 657,500 大会費 28,500)

支出之部

科目	予算額	摘要
人件費	1,070,000	夏、冬手当 @30,000×12 300,000 @30,000 校内寸志 (2人分) 50,000
交通費	60,000	通勤交通費其他
交需要額	50,000	切手、葉書、事務雑費
会議費	270,000	総会、懇談会、理事会其他
事業費	1,425,000	甲陽だより(2回)郵税其他 1,070,000、新卒名簿 60,000、大会費 150,000、封筒20,000、振替用紙他 45,000、記念品アルバム 80,000
雑費	240,000	振替料 70,000 研修費 120,000 其他(餞別、慶弔) 50,000
予備費	245,776	
計	3,360,776	

昭和五十一年度決算書

収入之部

科目	予算額	決算額	差引額	摘要
会費	2,300,000	2,940,500	640,500	入会金 648,000を含む
利子収入	180,000	90,917	△ 89,083	未積算あり
雑収入	20,000	74,200	54,200	名簿代、寄附金
繰越金	457,172	457,172	0	
計	2,957,172	3,562,789	605,617	

預り金 1,179,500

支出之部

科目	予算額	決算額	差引額	摘要
人件費	782,000	776,000	6,000	毎月手当、夏冬手当、校内寸志
交通費	60,000	51,910	8,090	通勤手当其他
需要費	50,000	28,835	21,165	切手、葉書、事務雑費
会議費	220,000	217,862	2,138	理事会、懇談会、総会
事業費	1,300,000	1,272,246	27,754	甲陽だより(2回)、郵税、夏季大会、新卒名簿、記念品、アルバム他
雑費	150,000	190,160	△ 40,160	振替料、研修費、慶弔費
予備費	395,172	100,000	295,172	特別積立組入
計	2,957,172	2,637,013	320,159	
繰越額		925,776		

繰越額より基本金 300,000 特別積立 100,000繰入、大会収入金 381,000

「近畿大会に出場して」 サッカー部

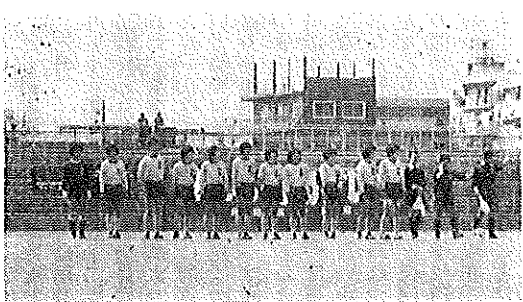
近畿大会——この晴れの大舞台で、ぼく達甲陽学院サッカー部は、力の限りプレーしました。

近畿大会——わが甲陽サッカー部としては初めての経験でした。この舞台に立つまでは、幾つもの関門を突破せねばならなかったのですが、その経過をここに報告し、同時に筆者の身勝手な感想をも付記したいと思います。

大会は、まず一月の阪神新大会予戦リーグから始まり、尼崎小田、鳴尾、川西緑台を軽く一蹴し、県予選出場を決めた。さらに阪神大会決勝トーナメントでは三位を獲得し、県予選シードのおまけもついた。この三位争いの相手は西宮東であった。甲陽はこのチームにはどうも頭が上がりなかつたのであるが、遂にねじ伏せることができた。その後放週間は、さらに県予選に向かって練習を積んでいったのである。

第二の関所である県予選では各地区からやって来た三十二チームが激突し上位六チームが近畿大会へコマを進めることになっていく。わが甲陽は、一回戦強敵六甲と対戦した。前半は、一対〇と優位に試合をすすめたが、後半一対一と追いつかれ、PK台戦にもつれこんだ。甲陽は、五人が皆きれいに決め、五対三で六甲をくだし片目があいたのである。続く二回戦では、これもまた宿命のライバル長田と戦うはめになった。長田は昨夏の総体の兵庫県代表で、甲陽はこのチームに對して過去一勝一敗二引き分けと全く五分の試合をしており、これはまさに因縁試合であった。前半は長田のスピードに押しまくられ、〇対一とリードを許したが、後半は甲陽ベースで試合が流れ、二対一とひっくり返した。しかし、タイムアップ直前に二対二と追いつ

かれ、一回戦に続いてこの試合もPK台戦にもつれ込んだ。今回も五人と決め、五対三で宿敵長田を敗り、両目を開くに至った。次の準々決勝では、名門神戸と対決することになった。ここまで神戸大会・県予選を通して失点〇の神戸の守りと、得点十七の甲陽の攻めが試合のカギを握ると予想された。まず、甲陽は得意の速攻で先取点をあげ意気あがった。しかし、神戸も、PKとPKで、一対二と逆転した。これに對して、甲陽も相手ゴール前で、ねばり二対二とし前半を終えた。



後半開始直後甲陽は混戦からあせったキーパーが飛出した。カラのゴールに蹴りこみラッキーな勝ち越し点をあげた。しかしD.Wのダイビングヘッドがパーに当るなど今一歩のところまでダメ押し点がかいらず、逆に疲れを見越してか猛攻に転じた神戸がたてつづけに二点を入れ、結局三対四で敗北してしまつた。神戸(県大会優勝、近畿大会二位)に敗れはしたものの、このゲームにおける甲陽は、最高に強かつたようであつた。

つづいて敗者戦では、波にのって州本を二対一で敗り、近畿大会に名乗り出たのである。甲陽は遂に、近畿の甲陽と変身したのであつた。

残念ながら近畿大会では、一回戦で和歌山の桐蔭に二対二からのPK台戦の結果二対四で惜敗してしまつた。しかし、甲陽サッカー部が、近畿大会に出場したことは、大へん意義のあることだと思ふ。これからも、よりよ

野球部よりOBの皆様へ

本年も夏季大会の兵庫県予選が近づいてきました。過去数年間一回戦ボーイのまま終わり、伝統ある実績に汚点をつけ続けていることを深く反省し、お詫びします。今年は何とか今までの鬱憤を晴らさんものと、連日練習に励んでおります。

このたび山野井萬氏よりユニホーム代の一部にでも十万円御寄附を頂きまして、毎度のことで大変恐縮に存じております。数年に一度、山野井氏を始めとして諸先輩方の御尽力により支援金を募

つて頂いています。そのお蔭で最近の野球部は経済的な面では支障をきたすこともなく、練習に専念できています。その上本年は多額の御寄附を頂いたのみならず、阪神タイガースのグラウンド整備員の方に頼んで甲子園球場からロストボールを五ダース御寄贈頂きました。昨今、練習ボール等の代金が高騰している折から、極めて有意義に使わせてもらっています。

あとは技術面の向上を目指すことだけが残された課題ですが、幸い本年の四月より三十年卒業の名投手小村英吉氏が、毎週土曜日の午後練習に来て下さり、特に投手の育成を中心にアドバイスして下さいただけではなく、土曜日曜などの練習試合にも殆んど全て来て下さり、時には球審なども

いチームづくりをめざして頑張りたいと思ふ。——再び大舞台に立てるようになり。——。終りに、いつもサッカー部に御声援御協力頂いているOBの皆様には心から御礼申し上げます。今後ともよろしく御指導お願い致します。(二年生森野記)

七月一日に滝川高校で抽選会があります。が対戦相手がどこになるにしても、本年はチームの団結力の強さによって何が何でも一回戦は勝ち取る覚悟でおります。

なお、今後の予定は、六月十八日(土) 対神戸高校(於神戸)、十九日(日) 対加古川西高校・対佐用高校のダブルヘッダー(於加古川西)、二十五日(土) 対鈴蘭台高校(於甲陽)、二十六日(日) 対大手前高校(於甲陽)の練習試合を組んでおり、学期末考査が七月二日・九日にあり、七月十日(日)か十一日(月)から三泊四日の合宿を行なつて本番に臨むことにしています。

今後とも、先輩諸氏の絶大なる御支援を賜りますことを期待しますと同時に、文武両道の併存を念願し、進学校としての名を挙げるだけではなく、スポーツの面でも先輩諸氏の築かれた実績に恥じないだけの成績を残すべく精進努力を重ねて参る所存です。

ありがとうございました。

野球部監督(英語教諭) 田村 真也

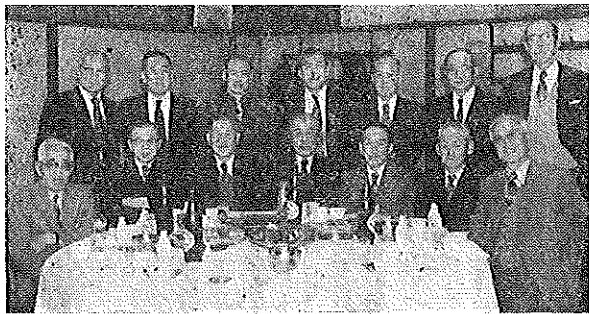
会員だより

第十四回

甲陽三三三二会（七回卒の集）

今年も恒例の第十四回甲陽三三三二会を三月三日に三宮金龍閣で開催した。毎年クラス会を督促して居た大西治三郎君、また昨年はずめて出席し次回より毎年出席すると張り切つて居た伊藤巖君が無情にも昨年八月何れも肝臓障害で不帰の客となられました之等の方々のご冥福を祈り一分間の黙禱をささげ会に入りました。年を忘れ大いに語り大いに笑いましたが、やはり年の故か話題は如何にして健康を保つかとなり各自の健康保持法の意見の発表となりました。

和気藹々の内に予定の八時すぎ次回の入学五十周年記念クラス会の再会を約して散会した。



出席者
河合文男、川合秀夫、河東利男、金澤幸雄、河本承三、中村壮二、中嶋清之助、橋本勝弥、浜田清次、浜野 勇、古塚 緩、茂幾信夫、山辺 正、山内喜一郎、十四名
(中嶋生記)

年会費に一層の協力を

年会費の制定より本年度で十年である。善い協力呼び掛けを甲陽だより発送のつどし、漸く効果が出てきたのか、どうにか発送数の三分の一に達した。

どの会でも年会費の収入がうまく行かないのが通例となっているが、かと言ってなくては困るのが同窓会のような会で、目立たず、日常に影響がないので関心がうすいのも無理からぬことであると思う。

基本財産がない以上年会費をたよりに運営していく以外に方法がない、せめて二分の一ぐらい納入者を得て、郵送料、印刷代の二分を一人が負担するような状態になれば余剰金も相当出来、母校とのつながりになる役立も出来、会としても新しく運営する方法も編み出して会員に少し位満足して戴くことが出来るのではないか。

五十一年度に「甲陽だより」二月に送付した便を利用して未納会員の善意を促したのであるが忘れ勝を思い出して戴き意外に多数納入を受け三分の一に達したような次第である。

大会と名簿

すでに御承知の通り、わが甲陽学院の発祥の地、甲子園の学舎は、満六十才の環階にある今年度で以て閉鎖となり、高等学校は来春から夙北角石町の新校舎に移転することになりました。

母校の歴史から申せば、第一幕甲子園時代を終え、一大飛躍を試みる第二幕に踏み出す訳で、誠に御同慶に堪えない次第ですが、青春哀歌の数年をこの地に過ごした私共卒業生にとって、甲子園の学舎が今年度限りで永久に消えてゆくことを思えば、転た寂寥の感を禁じ得ません。

それと共に、年毎に参加者も増大し、盛会

る。呼び掛けをすれば効果のあることは判然として居るが、郵税を考えると二の足をふむ。各期の委員が会合を持たれたときお願いして戴けば一番有難いのですが、何れにしても思い出して貰えるようにすることが一番大切なことである。

「甲陽だより」には各期の会合の便りをどしどし投稿下さることも一つの方法であると

回数	配付数	納入数	回数	配付数	納入数
1	61	37	11	76	32
2	46	23	12	58	34
3	45	22	13	77	35
4	42	17	14	65	29
5	57	32	15	81	34
6	59	24	16	74	24
7	54	23	17	66	25
8	62	28	18	79	33
9	49	19	19	101	33
10	83	38	20	157	67
11	76	32	21	129	57
12	58	34	22	130	47
13	77	35	23	157	52
14	65	29	24	100	38
15	81	34	25	133	50
16	74	24	26	15	5
17	66	25	27	62	19
18	79	33	28	58	23
19	101	33	29	9	2
20	157	67	30	24	4
21	129	57	計		
22	130	47		5,566	2,070
23	157	52			
24	100	38			
25	133	50			
26	15	5			
27	62	19			
28	58	23			
29	9	2			
30	24	4			

回数	配付数	納入数
高商之部		
1	67	26
2	81	25
3	59	20
4	58	24
工專之部		
1	45	9
計	310	104
総計	5,876	2,174

思う。(七月発送分は六月十五日、二月発送分は十二月二十日×切)

会員諸氏に重ねて育成に協力をお願いする。備考 七月発送の各期の配付数と納入会員数を記載して参考に供する。

を統括している夏季同窓大会も、甲子園学舎での会合は本年が最後となりました。若き日々の夢漂うこの学舎——枝川の清端と緑蔭の集い、逆転を重ねた野球の全国制覇、記念目を彩る藤波と南陵のハンケチ、別館と教練と查間、空襲火災と米軍接収、食堂と道場の再建、頭髪や服装の自由化、全共闘のゲバと封鎖等々——すべては遠くになりけりの感一入ですが、夏の日の一日、旧師旧友思い出の学舎に集い、美酒波み交わし肩相抱いて久瀧を叙し、逝きし日の名残を惜しもうではありませんか。

次に会員名簿の件ですが、前号昭和四十七年度版が諸般の事情の為に多分に杜撰でしたので、次号昭和五十三年度版(来夏刊行予定)は、新校舎落成並に移転記念号として、内容外観共に面目一新すべく鋭意努力してまいります。

併し名簿の生命は正確さにあり、それは結局会員諸賢の御協力がなければ期し得ません。御自身並に御友人等に住所動先等の異動訂正がございましたら、細大に問わず本部宛ご連絡下さい。最新の学年会、クラス会名簿を送って頂ければより好都合です。

なお、名簿は相当大部のもので、諸費高騰の折柄単価を如何に抑えるかに苦慮して居ます。一つには従来通りの広告掲載費によって費用の一部を捻出致す心算ですので、広く倍旧の御支援をお願いいたします。二つには印刷(販売)冊数が多い程単価が割安になります。今の所、これ迄の実績から一応二千部印刷、郵送料を含めて一部二千円と予想しておりますが、なるべく多数、早目のご予約を頂きたく、年会費の納入と併せてよろしく御協力の程願ひ上げます。

会員名簿整理について

六十周年と新校舎完成を記念して名簿を発刊することにしてあります。甲陽だよりを発送する毎に返送があります。考えてみれば無駄な繰り返しをやっている次第、然しこうしなれば完成に到達しないかと思うが、善意ある人々の年会費を消費しているのが情けないことである、静かに反省を促したい。

二月発送の分の返送があった方々です。

- 第二一回 榎原賢太郎
- 第十四回 長沢祥光
- 第十五回 北野良雄
- 第十六回 長沢成男
- 第十七回 関 実夫
- 第十九回 百瀬信政、金子 良
- 第二十回 山下正治、武田信夫、大場正範、尾崎莊一
- 第二十一回 田窪広利
- 第二十二回 塚本 繁、諸戸立雄、小林英二
- 第二十三回 朝田修平、宮崎 修、瀬能貞雄
- 第二十七回 可児辰雄
- 第三十二回 日比 守
- 第三十三回 北村豊治、山田正照、中島道和
- 第三十四回 熊沢 一、福田 律
- 第三十五回 砂村 賢、江口建之
- 第三十六回 浜口光彦、舟越辰緒、長手朋彦
- 第三十七回 花房正次郎
- 第三十八回 木村堅太郎
- 第三十九回 宇多照雄
- 第四十回 長峯興治、篠田勝郎、川崎真介
- 第四十一回 松平 宏、松原 功
- 第四十二回 関 昌雄、降尾彦一郎
- 第四十三回 田中慶一
- 第四十四回 森本静夫、鏡 二博、青木宏行
- 第四十五回 中野建城、小林登明
- 第四十六回 小山栄三、志方英三

- 第四十五回 橋川武宏
- 第四十六回 粕谷淳一、永田 隆、中井通治
- 第四十七回 山根 修
- 第四十八回 天野研一、本庄政昭、細野芳男
- 第四十九回 森本達夫、池田吉太郎
- 第五十回 遠山雅夫、梅原一路
- 第五十一回 辻 光宏、尾崎敏之、齋明寺哲
- 第五十二回 湯浅省一、林 宏之、黒川正夫
- 第五十三回 細 田修、井上 宏
- 第五十四回 福成雄三
- 第五十五回 岡 恒
- 第五十六回 伴 政雄、桜井太郎、北 信夫
- 第五十七回 渡辺昌弘、川田 剛、石見勝弘
- 第五十八回 木村宣久
- 第五十九回 島 和彦、岩合啓介、高師俊輔
- 第六十回 高商之部
- 第三回 中西竹二
- 第四回 川添明良、土岐恵三

退職ご挨拶

山田 隆 明

この度は小生の退職に当り、過分の御成別を頂きまして有難うございました。

同窓会の会計事情も多少存じておりまして誠に申訳ない多額にて恐縮致しております。

数年間あれこれ思いつつもこれといった事もより致しませず、誠に慚愧に耐えません

にもかかわりませず同窓として深い御厚情を賜わりまして実に有難い数年間でありまし

た。今後とも何卒よろしく御願ひ申し上げます。

校歌、応援歌の作詞者

山田 在夫 先生

長寿を全うさる

信時 深作曲の「嗚呼青春の血は燃えて武庫の老松春來れば高鳴る胸若人われら妙なるひびき玉の緒の 理想の調かなでつつ輝くのぞみ心ぞ勇む」という格調高い校歌、山田耕筈曲の「武庫の原頭 雲はれて 健児のまゆは輝けり かいなにもりし みなざる血しお 試練の旗の くれないにし もゆる我等の意気みずや 正々堂々 甲陽健児」という我等甲陽生が青春のひとときを甲子園原頭で愛唱した応援歌、そのいずれもが山田在夫先生の作詞によるものであります。

先生は明治十八年十一月十七日に大分県豊後高田市でお生まれになり、大分師範をご卒業、当地の小学校でしばらく教鞭をとられてのち専修国語科の資格をとられ、鹿児島県立国分高等女学校、鹿児島市立第一中学校、鹿児島第一師範の主事を歴任され、昭和二年に伊賀駒吉郎校長の招きにより甲陽中学校へ赴任してこられたのであります。竹を割ったようになさったばかりの明朗な性格で、古武土的な風貌は口が大きかったことと相まってクジラの愛称で生徒から畏敬されておられました。人情にもろく世話好きであられた先生はその反面大衆に迎合することを嫌われ最後まで信念をまげなかつた点、明治の典型的なロマンチストといえましよう。

先生は戦争末期、甲陽高等商業学校、戦後は樟蔭女子専門学校、樟蔭専高等学校でも奉職され、六十余年に及ぶ教員生活を立派に過ぎられました。ご家族連にも恵まれ自作の浄瑠などを苦楽をとも白髪までと誓われた奥様より縁と仲睦まじく語り合われ老後を平穩に過してこられました。昭和五十二年三月一日老衰のため九十一才をもって逝去。ここに謹んで先生のご冥福を祈り上げます。

△ご遺族の現住所▽

〒83 西宮市甲子園七番町10-7
山田 陽 一様
(TEL 0798-471872)

「同窓の亡き友よ」

(一五卒) 大 林 豊 治

寒夕焼かの日の雲に征きし友
還りあらむと牡蛎樽さげて訪ひしかど
枯茨の門をへだてて友の父
牡蛎樽を戦死の友の父に渡す
君翔ちし寒夕焼の日もかくや

訃 報

左の方々の訃報に接しました。謹んで御報告を申し上げますと共に御冥福をお祈りします。

- 吉本 五郎(第一回) 昭和五十二年二月二日
- 熊倉 成一(第一回) 昭和五十二年五月十九日
- 木ノ本徳太郎 昭和五十一年十月十九日
- 北村 周三(第四回) 昭和五十一年十二月二十九日
- 久保田義章(第五回) 昭和五十一年十月八日
- 大西治三郎(第七回) 昭和五十一年八月二十一日
- 伊藤 巖(第七回) 昭和五十一年八月十四日
- 鷹村 久至(第九回) 昭和二十一年十一月四日
- 森重 猛夫(第十一回) 昭和五十二年六月一日
- 小沢正春(第二十回) 昭和五十一年十月